

# 登録速報（適用拡大）

農薬名：ジベレリン明治

登録番号：第6004号

登録日：2020年6月24日

## 適用拡大登録内容

農薬登録申請書第7項「適用病害虫の範囲及び使用方法」を以下のとおり変更し、（別紙1）のとおりとする。

- 作物名「紅まどんな」を追加する。
- 作物名「かんきつ（不知火、ぽんかん、かぼす、清見、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズキチ（無核）、温州みかん、きんかんを除く）」を「かんきつ（不知火、ぽんかん、かぼす、清見、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズキチ（無核）、温州みかん、きんかん、紅まどんなを除く）」に変更する。
- 作物名「ばれいしょ」の使用目的「休眠打破による萌芽促進及び小粒いもの増収」を「休眠打破による萌芽促進及び小粒いもまたは全粒種いもの増収」に変更する。
- 作物名「種いも用ばれいしょ」を削除する。
- 作物名「かき」の使用濃度「ジベレリン50～200ppm」を「ジベレリン12.5～200ppm」に変更する。

※当該変更に伴う、農薬登録申請書の記載事項変更：

第8項「使用上の注意事項」の(8)、(20)及び(21)を変更、(19)を削除し、現行(19)以降を順次繰り上げ、（別紙2）のとおりとする。

(別紙1)

【変更後】

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジアルリを含む農薬の総使用回数
かんきつ (不知火、ぼんかん、かぼす、清見、はるみ、ワツソネブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズ子(無核)、温州みかん、きんかん、紅まどんなを除く)	花芽抑制による樹勢の維持	ジアルリ 2.5ppm	200~700 L/10a	収穫後~3月	1回	立木全面散布又は枝別散布(マツ油乳剤 60~80倍液に加用)	1回
		ジアルリ 10ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後		立木全面散布又は枝別散布(ブチドワイヤシ 2000倍液に加用)	
	落果防止	ジアルリ 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~ 満開 10日後		立木全面散布又は枝別散布	
		ジアルリ 10ppm				散布 (ブチドワイヤシ 2000倍液に加用)	
紅まどんな	花芽抑制による樹勢の維持	ジアルリ 2.5ppm	200~700 L/10a	収穫後~3月	1回	立木全面散布又は枝別散布(マツ油乳剤 60~80倍液に加用)	3回以内
		ジアルリ 10ppm	50~250 L/10a	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後		立木全面散布又は枝別散布(ブチドワイヤシ 2000倍液に加用)	
		ジアルリ 25~50ppm	50~100 L/10a	開花始め~ 満開 10日後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止	ジアルリ 10ppm				散布 (ブチドワイヤシ 2000倍液に加用)	
		水腐れ軽減	ジアルリ 0.5~1ppm	50~500 L/10a		着色終期 但し、 収穫7日前まで	
ばれいしょ	休眠打破による萌芽促進及び小粒いもまたは全粒種いもの増収	ジアルリ 5~10ppm	-	植付前	1回	30秒間種いも浸漬	1回
			250~300mL/種いも10kg			種いも散布	
かき	落果防止	ジアルリ 12.5~200ppm	30~100 L/10a	満開 10日後	1回	幼果及びへたに散布	1回

(別紙2)

(2) 使用上の注意

(8) かき

- ①散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなるおそれがあるので、使用時期を誤らないこと。
- ②本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節すること。
- ③散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行うこと。
- ④品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用すること。

「富有、早秋、太秋、新秋、甘秋」

- ⑤「中谷早生」では着色遅延のおそれがあるため、25ppm以下の濃度で使用すること。

(19) ばれいしょ

- ①種いも切断後の処理は薬害を生じるおそれがあるので、必ず種いもを切断せずに処理する。
- ②浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
- ③薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくとう芽遅延等の薬害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
- ④種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
- ⑤薬剤処理した種いもは食料又は飼料には使用しない。
- ⑥品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用すること。

(20) 花き

- ①処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意すること。

- ②処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧すること。

③チューリップ

イ. 本剤のチューリップへの利用は促成栽培（促成栽培、半促成栽培）に使用する。

ロ. 処理時期は草丈が7～20 cm（適期：10～15 cm）の頃である。

ハ. ジベレリン溶液は筒状の葉の中心部に1回、又は2回（7日おき）滴下する。滴下量が多くなると薬液があふれ、通常溜まる量が過剰分に引きずられて流出し、効果が不安定になるので注意する。1.0 mlの滴下であふれる場合は、保持される最大の量に止める。

ニ. 滴下前に灌水をすませ、筒状の葉の中の水はあらかじめ取り除いておく。滴下後は2～3日灌水をひかえる。

ホ. 品種により、感受性の差異がみられるので、感受性の強い品種（ウィリアムピット、ゴールデンハーベスト等）を選んで使用するのが有利である。

④さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、莖の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決めること。

⑤りんどう

イ. 処理は葉が十分濡れる程度に散布すること。

ロ. 使用時期の定植直前は苗姿3～4対葉期を目安にすること。

ハ. 切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保すること。

#### ⑥ソリダゴ

イ. 高温期の処理では効果を示さないので、低温期（11～3月頃）に処理すること。

ロ. 処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。

#### ⑦さくら(切り枝促成栽培)

休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理すること。

以上